日本軍の軍事医学に関する最先端の歴史研究

闇に埋もれた悲惨な破傷風事件を、七三一部隊をはじめとする日本軍の軍事医学ネットワークにおける
ワクチン開発の文脈に位置づけて、広く世に知らしめる

倉沢愛子・松村高夫 著
▶ワクチン開発と戦争犯罪
インドネシア破傷風事件の真相
3・14刊 四六判274頁 本体2300円
岩波書店

土屋貴志

『図書新聞』第3600号 (11/22/2003) p.2

一九四四年、日本占領下のジャカルタで、収容所に入れられ移送を待っていたインドネシア人の間で破傷風が集団発生し、三百人以上が死亡した。パレンバンやボルネオに送られた者たちから出た死者も合わせると、五百人以上が破傷風で死亡している。

日本軍は、インドネシア各地から、およそ三十万人ともいわれる現地住民を、労働力として徴発していた（彼らは現地語でも「ロームシャ」と呼ばれる）。ロームシャたちはジャカルタの収容所に集められ、チフスやコレラや赤痢等の予防接種を受けた後、東南アジア各地へ送り出されていた。その予防接種液の中に、破傷風の毒素が入っていたのだ。

予防接種液を作ったのは、満州第七三一部隊（関東軍防疫給水部）の姉妹部隊である「南方軍防疫給水部」だった。南方軍防疫水部は、ソ連との戦争を念頭に生物兵器の研究開発と製造を七三一部隊で行なっていた日本陸軍が、米英との開戦により南方に力を振り向けるために、占領後のシンガポールに設置したものである。インドネシアにはその支隊がバンドンに置かれ、そこで製造されたワクチンが、ジャカルタの収容所に送られて、ロームシャたちに接種されたのだ。

だが日本軍は、インドネシア人医師が予防接種液に破傷風菌を混入したという謀略説をでっち上げ、しかもその首謀者としてインドネシア医学界の重鎮アフマッド・モホタル教授を、その部下や接種を担当した収容所医務班の医師たちとともに逮捕した。憲兵隊は彼らを激しく拷問し、ジャカルタ市衛生局のアリフ医師が勾留中に死亡。モホタル教授は一人罪をかぶって「自白」し処刑された。医務班のスレマン・シレガル医師も禁錮刑になり、まもなく獄死した。日本軍は予防接種禍により膨大な数のロームシャたちを苦悶死させただけでなく、それを謀略に仕立て上げ、占領政策に不都合な存在であるインドネシア医学界を崩壊させたのである。

しかし、この事実は、日本はもちろん、インドネシア国内でも、ほとんど知られてこなかった。著者の一人である倉沢はインドネシア現代史が専門で、三〇年以上にわたり、関係者への聞き取りも含め、この事件を丹念に追ってきた。もう一人の著者である松村は英国経済史家であるとともに七三一部隊研究をリードしてきた。この二人の歴史学者が協働し、闇に埋もれた悲惨な破傷風事件を、七三一部隊をはじめとする日本軍の軍事医学ネットワークにおけるワクチン開発の文脈に位置づけて、広く世に知らしめた。

ところで、本書は、知られざる歴史的事実を白日の下にさらしただけでなく、歴史学的にも非常に重要である。

第一に、生物兵器を使用する際には自国の兵士を感染から守る必要があるため、生物兵器開発とワクチン開発は並行して行われる。つまり、日本軍が、人を攻撃する生物兵器を開発しながら、同時に、人を助けるワクチン開発を行っていたのは、当然のことなのだ。

第二に、すでに日中戦争の戦場になっていた中国中部や南部に加え、米英との開戦により東南アジアやメラネシアも戦場となり、日本軍にとって、こうした南方での戦闘における傷病の予防法や治療法の開発が急務になったことは容易に推測できる。にもかかわらず、日本軍の軍事医学に関する歴史研究は、これまで南方にほとんど目を向けてこなかった。歴史研究者の関心は、被験者を調達するシステムを作り上げて致死的医学実験を大規模に行い、撤退時には被験者全員を殺害して徹底的に証拠を隠滅したという特異性ゆえに、戦場にはならなかった中国東北部（満州）にあった七三一部隊に向かいがちで、南方軍防疫給水部については、わずかにシンガポール在住の研究者が熱心に取り組んでいる程度であった（林少彬［リム・シャオビン］「南方軍防疫給水部の記録を探し求めて」『十五年戦争と日本の医学医療研究会会誌』二〇巻二号、二〇二〇年三月）。だが、南方軍防疫給水部は、七三一部隊長石井四郎の「番頭」格である内藤良一が出張し、組織づくりと研究体制の確立に努めた（常石敬一『七三一部隊全史』高文研、二〇二一年、第五章）ことから見ても、日本軍にとって重要な軍事医学拠点であったことは明白で、今後さらに詳細な探究が必要である。

以上二つの点で本書は、日本軍の軍事医学に関する歴史研究にとって、最先端の業績であるとともに、今後探求すべき方向をも指し示す、画期的な著作といえる。

（大阪公立大学文学研究科教員）